日の晴も秋は十方に暮にけり　仙台　智幽
仰きみる老木の柳散にけり　南明
秋はもの、殊に名の木の散ゆふへ　一止

遅来

悲しさは雁にもならぬ便かな　遠州　嵐牛
百に手のやかてと、くをちる柳　杜水
あすありとたのむの鴈の音に鳴て
おこたりしみをくゆるけふかな　資昌

適莫有といへとも五十六年の交り
一夕の夢となりぬ嗚呼昔は其はし
めを誘ひ今は其終りを歛む流石に
其交りを思うて只机に寄て黙するのみ
月を待こ、ろもなくて秋の暮　清民

観山居社徒

露とかけ残して入りぬ四日月　春斎
はせを葉や、ふれて寒き露の音　壮山
ゆく月の露のみ草に残りけり　文起
入月のあとやつめたき神の露　漸風
花も実も過し終りや名の木散　庚華
しら露の玉と光りて消にけり　清知

晴霞庵門人

木犀は風のあとほと匂ひけり　仙台　河玉
かれて飛尾花光るや西日かけ　結城　得来
遠くから来て鳴墓のわたり鳥　常陸　晴山
いくとせの匂ひ残して菊かれし　福良　敬斎
ゆくかけの残り多さよ秋の雲　当所　春路
次の間に鳴明しけりきり〳〵す　東明
祖母の亡骸の前に親族みな
通夜し侍りて
夜を虫の音もくり返す念仏かな　孫　晴山
身の秋や露と消にし人かなし　曾孫　旧池
入る月のあとは夜寒のなみた哉　曾孫　せん女

むかし慈母寡と成給ひし懐に
養はれて猶六十年の送光に
恩愛を重ねし身の報ひ奉る
こともなくてけふの別れとは成けらし
かきりなく悲しき空や秋の月　男　桃丘

慶応丙寅仲秋　樫斎書　印

㉘ 未明亡父追悼摺

□□□